

善導大師の懺悔觀

中岡隆善

淨土教が特に悲泣と懺悔とより興起せることは、「觀無量壽經」に於いて見られることである。韋提希夫人の悲泣雨淚は宿業の深さを感じてのものであつた。爭もあらうに眷属同胞の面に於いて憎み合ねばならぬという淺聞しさに悲泣せるのである。宿業に泣く淚は声も立てられぬ濁りがあるのではなからうか。この悲泣に於いて韋提希は求哀懺悔するのである。その懺悔も愚痴に近い。我等は愚痴以上の懺悔は出来ないものであらうか。かくて韋提希は濁惡の世に於いて悲泣し懺悔した。その悲泣と懺悔とが淨土教の基をなしているのである。

純正淨土教の善行者たる善導大師は、是くの如き韋提希の愚痴の凡夫性に立脚し所謂、機の眞實を與へずものとして古今を稽定したる大師の教導は、人間としての自己を見詰めることより充足せるものにして、かゝるところよりして大師の懺悔觀は見出されるのである。自己の罪惡性を見極めずして懺悔の心起る筈はない。先づ眞實の自己を見詰めることである。大師は深心釈の中に於いて、

「一には決定して深く信ず。自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、脇劫よりこのかた常に没し

幣に流転して出離の縁あることなし⁽¹⁾。又、「自身は是れ煩惱具足せる凡夫、根薄少にして三界に流転して必定を出でず⁽²⁾」等、

と述べてあるが如き機の深信は、やがて罪にすゝり泣く凡夫の悲泣と懺悔を生み、眞実の教法の前に大いに慚愧懺悔して法の深信を得る時、悲泣は歇じて歡喜となり仏徳の讃嘆は盡くることとなりて、懺悔業障の餘蘊は深く身に沁むのである。それは濁惡の世に於いて苦惱するものゝ身證でなければならぬ。こゝに大師はこの身證に於いて特に「往生礼讃」に懺悔を勧誘し叙説せらるゝものである。難修不至心の者には慚愧懺悔の心有ることなきを學中、聖・略・廣の三品の懺悔を六時行法の初中終に配置し、意に随つていづれかを用ゆべきを示し、礼讃を以つて始終する六時の行法は亦懺悔を以つて始終することを示してあるは、誠に大師の周到なる用心に表づかしめられるのである。而して茲懺悔の用心に、（淨全四・三七四ノ上）

「上品の懺悔とは身の毛孔の中より血流れ、眼の中より血出る者を上品の懺悔と名く。中品の懺悔とは偏身に熱き汗毛孔より出で、眼の中より血流れる者を中品の懺悔と名く。下品の懺悔とは偏身徹て熱く眼の中より涙出る者を下品の懺悔と名く。」

と懺悔の誠を致す行者の心品に悲痛なる上中下の三品あることを示し、次に

「此等の三品差別有り」と雖も、即ち是れ久しく解脱分の出根を種たる人なり、今生に法を教へ人を重して、身命を惜まず、乃至小罪までも若し懺すれば、即ち能く心に徹り體に徹ら便むる事を致す。能く此の如く懺すれば、又近を向わず、所有重障積に皆滅盡す。若し此の如くならざるは、縱便に日夜十二時急に走むれども象て是れ益無し、若し作と不る者は、應に知るべし流淚流血等に能はずと雖も、但能く真心徹到する者は、即興上同。」

と説示されてゐるのは、その用心の深さと峻厳なる行持を保たれし指導大師にして、始めて述べ得らるゝ言葉である。

要懺悔には、五悔の中懺悔・面向・発願の三悔を出し、略懺悔には懺悔・勸請・隨喜・面向・発願の五悔を以つて懺文し、師僧・父母・善知識、法界衆生の四類の人の迄永代懺し共に誘つて往生せんとする大師の懺悔の目的は、同得往生ではあるが、大師の主義は勿論正定業の専修念仏によるのであるから、懺悔を以つて往生の正因に見えるようではあるが、礼拝の行に自ら伴うものであれば、あくまで助業であることと言うまでもないのである。礼拝は林名の正行の上に必然に生ずる実践行であつて、眞に喜んで林名相續せらるゝならば、自から仏に対する最上の恭敬を示す礼拝行が生れて求なければならぬ。礼拝は仏を仰ぐ姿であるから、行巻は自から光明世界の人となつてゐるのである。如來の光明に照されては行巻自身の醜き姿がいよいよ明らかになり反顧せられるに依つて、一その懺悔の起り如來への感謝の念絶えざるものとなる。かゝる思念に依つて大師は長巻にすゝめられるのである。広懺悔の文は大方等陀羅尼文四一大正藏至廿一・六五六、十住毗婆沙論卷三・大正藏至廿六・三四一等に出乎る文に依つて構成されてゐるが誠に毫露懺悔である。罪之多少に至つては所懺の罪体を明してある。纂要⁴⁷には持經の諸註を引いて詳悉してゐる如くである。而してこの広懺悔を表台し了つて本文に、

「今日より始めて願ふは、法界の衆生と共に邪を捨て正に皈し、菩提心を発し、慈心を以つて相向ひ、仏眼を以つて相着て、菩提まで誓願し、眞の善知識となつて同じく阿耨陀仏國に生じ乃至成仏せん。此の如き等の罪永く相續を断じて更に敢て作らず。懺悔と已つて至心歸命阿耨陀仏。」

と結誓するが如き情念は、大乗仏教浄土教徒の理想を遺憾なく表示してゐるものと見られる。

かゝる要・略・玄の三品作法懺悔は、聖道活師(5)の懺悔に慣つたものと見られるが、特に玄懺の方軌は上根に就いて初むとは私記(6)の説であるが、到底下根の及ぶものではないからう。然し乍らこゝに玄懺悔を擧ぐるは、もとより多類の戒を擧げて往生せしめん爲の大師の意であつて見れば、是くの如き玄懺の法あるは当然であり、又大師の時代に於いては勤め得られたことかもしれない。然し大師はかゝる聖道法としての懺悔を随義取用して、凡そ相応の規範として示すものであれば凡そ自覺に基づく人間觀に立脚した處が深く窺われるのである。このことは般舟經に説かるゝ、念々林名常懺悔(7)の言葉ではなからうか。あさましき自己を信知せられた懺悔は後念に念々林名常懺悔となつていくものである。之れ偏へに大師の最も重視せらるゝ所以のものである。又四修法に示す念時日の隨犯隨懺(8)は行巻の作業に必然のものでなければならぬ。たとい小罪と雖も懺悔すれば、あらゆる重障を頃に滅盡することを得とまで釈明された懺悔は、但能真心徹到者即與上同(9)の如き安心に於いても亦起行にありても、「念々林名常懺悔」とあつて大師の最も重視せるところであり、又安心、起行作業に到へる大師の懺悔はまことに行き届いた説示である。

思ふに大師の懺悔觀は觀經を根底と人間觀に立脚し、末法五濁の世に罪惡生死の凡そ人の戒を深信せしめて悲泣も懺悔し、以つて厭離穢土欣求淨土への思念をつくり、林名念仏の一行に帰結せんめんとしたのが大師の懺悔觀ではなからうか。かゝる所以のもとに大師の懺悔の力説が行巻の三業に盡くしみるのである。

(8) (17) (6) (5) (4) (3) (2) (1)

觀經疏・教旨義、深心釈

(淨全二・五六ノ上)

往生礼讃・前序、深心釈

(淨全四・三五四ノ下)

往生礼讃・前序、雜種十三失中ノ九

(淨全四・三五七ノ上)

往生礼讃纂釈、懷音撰

(往生礼讃の末書)

(淨全五・)

曇鸞、(讃阿弥陀偈)、天台、(法華三昧懺法)

主として之らに同意の懺文あり。

往生礼讃私記、良忠撰

(往生礼讃の末書)

(淨全五・)

般若讃十九丁右

(淨全四・五三八ノ下)

往生礼讃・前序、四修法中ノ三無間修

(淨全四・三五五ノ下)

参照

以上

... (faint vertical text columns) ...